サネ鬼の怪

アサオ

この作品はR18描写を含むため、18歳未満の方は閲覧禁止です。

HinaProject Inc.

注意事項

このＰＤＦファイルは小説家になろうグループサイトで掲載中の作品をＰＤＦ化したものです。
　このＰＤＦファイルおよび作品の取り扱いについては、小説家になろう利用規約が適用されます。そのため、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止いたします。作品の紹介や個人用途での印刷および保存にはご自由にお使いください。

【作品タイトル】
サネ鬼の怪

【Ｎコード】
Ｎ３９２７ＧＧ

【作者名】
アサオ

【あらすじ】
　禁じられた小島に立ち入った恐れ知らずの海女に、恐ろしい化け物が襲いかかる。海女は見事に化け物を仕留めるが…。そして、時は流れ…。
以前投稿した「海女と『サネしゃぶり』」の大幅なリメイク作品となっております。
※旧作からグロテスク・残酷描写がアップしているのでご注意下さい。

※諸事情により、本作は打ち切りとさせていただきます。続きを楽しみにして下さっていた皆様、誠に申し訳ありません。

海女と「サネ鬼」

昔々のお話。
海辺のある村では、絶対に近づいてはならない場所があったという。
村の最西端の浜から、一里（約４キロメートル）ほど沖にある小島。
五丈（約１５メートル）ほどの大きさの岩の上に僅かばかりの木や草が生えた、大して面白くもない島である。
何でもその小島の周辺には恐ろしい化け物が棲んでいて、人が足を踏み入れようものならたちまちのうちに喰い殺され、それが若い娘であれば拐かし、ひどい悪さをするのだという。
そんなわけで、村の男女共に件の小島近づく者は誰一人いなかった。
「そんなの、迷信に決まってる！そんな化け物いるわけが無いだろ？本当にいたとしても、このアタシが返り討ちにしてやるよ！」
こう言ってはばからないのは、村に住む一人の若い海女。名をイソメといった。
年は数えで二十。小柄で、特別器量が良いわけではないが、腕っ節の強さが自慢の女丈夫として、村の者達から一目置かれていた。
彼女の武勇伝の中でも特に強烈なのは、漁の最中に自分に襲いかかってきた大きさ一丈（約３メートル）ほどの鮫に、アワビを岩から剥がすときに使うノミ一本で立ち向かい、見事にこれを仕留めたという逸話であろう。
この一件は、「鮫殺しのイソメ」として村での語り草になっている。
そんな彼女が、化け物などに恐れをなすはずが無かった。
「今まで人が入らなかった場所だから、きっと獲物がたんまりとある事だろう。アタシがそこへ行って、漁をしてきてやる。ついでに化け物とやらも取っ捕まえてきてやるよ！」
こうしてイソメは年寄り衆が止めるのも聞かず、桶とノミを手にふんどし一丁で件の小島へと出かけていった。

「おお、いるいる！大漁大漁！」
イソメが思った通り、長らく人が立ち入る事のなかった小島の周りの岩場はアワビやサザエの巣窟となり、絶好の穴場と化していた。ちょっと潜っただけで、アワビやサザエが面白いように獲れる。しかも、そのどれもが大振りの上物ばかりである。
桶はすぐに、獲物でいっぱいになった。
「ちょっと一休みするか…な？」
海から顔を出したイソメは、舟の上へと上がった。
雲一つ無く、どこまでも青く澄みわたった空。風もほとんど吹いておらず、海の表情も穏やかだ。
傍らに獲物で一杯の桶とノミを置き、舟底に筵を敷いて、ゆっくりと身体を横たえた。
海水で冷えたイソメの身体が、徐々に温まっていく。
―こんな良い穴場のどこに、人食いの化け物なんているんだよ…。
勿体ない話じゃないか。アタシはここを根城にして、がっぽり稼がせてもらうよ…！
自分だけの最高の漁場を見つけた喜びと陽の光の温もりの中で、イソメはまどろみ始めた。そしてまどろみの中で、幼い頃の記憶を思い出していた。
海女小屋の中で絡み合う、一組の若い男女。まだ子供だったイソメは、小屋の中で繰り広げられる2人の秘密の営みを、こっそりと覗き見ていたのだった。
裸の若い海女は同じく裸の若い漁師に、股間の一点を愛撫されていた。舐められ、吸われ、指先でこねくり回され。
「あ…あぁ…。もっとぉ…！」
女の顔はだらしなく蕩けきり、そこを弄られる度に気持ち良さげに喘ぐのだった。
その夜、寝床の中で家人に見つからぬよう見よう見まねで自分のそこを自分で弄るイソメ。最初のうちこそうまくいかなかったものの、

何日かかけて試行錯誤するうちに、生まれて初めて「それ」を感じる事ができたのだった。
…シたくなっちまった。
イソメの胎内で、ムクムクと劣情が頭をもたげ始めていた。股間に手をやるイソメ。海水とは別の、ヌルヌルしたモノでふんどしが湿らされている。
…ここでシちまうか。
イソメはそそくさと立ち上がり、腰に巻いたふんどしを解き始めた。ここは村にとっての禁足地。当然、自分以外に誰もいない。
そんな状況が、イソメに残された恥じらいを取り払う。
とうとうふんどしを解き、産まれたままの姿となるイソメ。
身の丈は四尺九寸（約１４７ｃｍ）。潜るのに邪魔だからと短く切り揃えた艶やかな黒髪に、きりっとした太い眉。一重まぶたの、幼さが残る顔立ち。
二つの乳房は小さく、まるで小皿を伏せたかのようだ。小皿の上の小振りの乳輪の先端では、やはり小粒の乳首がつんと自己主張している。
小さめで引き締まった尻と、細身ながらも筋肉質の太腿。すらりと細く、しなやかな手足。
鍛え上げられた筋肉の上をうっすらと脂肪が覆い、さらにその上を日に焼けた浅黒い肌が覆っている。
逞しくしなやかで健康的だが、やや色気に欠けた肉体。
一見すると少年のようだ。
しかしながら、露わになった股間には男の証が見あたらず、黒々とした茂みが豪快に生い茂るばかりであり、茂みの下の割れ目とそこから漂うむせ返るような牝の臭いとが、イソメがれっきとした女である事を証明していた。
真っ裸になったイソメは仰向けに寝そべり、自分の股間へと手を伸ばした。指で黒く生い茂った陰毛を掻き分け、分厚く黒ずんだ二枚の肉の襞を押し広げる。真っ黒で不細工なイソメの肉アワビ。

そこは既に白濁とした蜜にまみれ、テラテラと熱く滑っていた。
イソメの指はついにその先端、肉襞が重なり合う一点にひっそりと息づく「それ」を探り当てる。
サネ。陰核。イソメの中の獣が宿る、小さな肉の突起。罪深き欲望の権化。そしてイソメが至福のひとときを得るための、とても大切な宝の珠。
イソメの飯粒大の陰核は充血してぷっくりと漲り、コリコリと硬くしこって包皮から薄い桃色の愛らしい顔を覗かせていた。
―おサネが、もうこんなに…！
イソメは熱く火照るそこを鎮めるために、皮の上から撫で回すようにゆっくりと擦り始めた。その一点から発せられる、むずむずするようなくすぐったいような甘く心地良い刺激に、イソメは息を荒くし、顔を紅潮させた。
―アタシだって女子（おなご）だぞ！？
まるで少年のような、幼さと女の色気に欠ける容姿、そして男顔負けの気の強さと言葉遣いのお陰で、イソメは村の若い男達に年頃の女として見てもらえずにいた。村の衆にとって、イソメは同性の悪友か弟のような存在で、卑猥な冗談で笑い合う事はあっても彼等の恋愛対象にはなりえなかったのだ。
―アタシだって、ここを男の太い指でグリグリとこねくり回されたい！逞しいイチモツで、陰部（ほと）を突かれて滅茶苦茶に掻き回されたい…！
イソメも女である以上、男の身体への興味や性に対する欲望は人並みに持っている。否、イソメのそれは並みの女よりもずっと強かった。
イソメは欲望が満たされぬ不満をほぼ毎日、自分の小さな肉芽にぶつける事で心身の平穏を保っていたのだった。
「んっ、ふぅ…んんっ！」
イソメの指の動きが、次第に過激になっていく。より強く、激しく陰核を擦り、こねくり回す。時折、軽く指で弾く。

サネより生じる甘美な衝撃が強さを増し、イソメの身体の隅々までを蕩けさせていく。
―もうイく…。…イく！
「あはぁっ！？」
イソメの身体が大きく仰け反りながら、快楽の頂点へと到達した。
ヒクッ！ヒクヒクッ！キュウッ！キュッキュッ！
陰部(ほと)がドロリと淫水を吐き出しながらヒクつき、尻の穴が律動的に収縮を繰り返す。
そのままグッタリと横たわり、絶頂の余韻を愉しむイソメ。
バシャッ！
「…！？」
突然、舟のすぐ近くで水音が響き渡った。
イソメは咄嗟に飛び起き、ノミを手にして音がした辺りの水面を凝視した。
水面の下で、大きな影のようなものが蠢いている。何かが、いる。
イソメはいつでも応戦できるよう、体制を整えた。
―たいよぉ…。
かすかに若い女の声が聞こえた気がした。
と同時に水面が大きく波打ち、水しぶきを上げてそいつが飛び出した。
「キイィィィィ！」
そいつが鎌首をもたげ、甲高い嫌な鳴き声を上げる。
それは、ウナギかヘビのような化け物だった。海面から姿を現した分だけでもイソメと同じくらいの丈がある。胴の太さは三寸（約9センチ）ほど。頭には耳はもちろん目も鼻の孔はおろか鰓蓋も無く、ただただ鋭い牙を生やした、耳の辺りまで裂けた口があるだけ。
黒ずんだ赤い身体には鱗も無くヌメヌメとした肌に覆われ、所々節くれだった血管のようなものが浮き出ていた。
「シャアァァァァ！」
イソメを海中に引きずり込むつもりなのか、化け物が牙を剥き出し

て、ものすごい速さでイソメの足下目がけて飛びかかっていにく。
イソメは紙一重の差で身をかわし、化け物の首を力一杯踏みつけた。
「ギャアアアア！！」
化け物が悲鳴を上げ、のたうち回る。
「こんのやろおぉぉ！！」
イソメは渾身の力を込めて、化け物の脳天にノミを振り下ろした。
鮮血が飛び散り、イソメの股ぐらを、陰毛も陰部(ほと)も真っ赤に染め上げていく。
化け物の動きが次第に弱くなっていく。
「キュウゥ…」
そして断末魔の声を上げると、そのまま微動だにしなくなった。
「これが、例の化け物…！？」
何だ、大した事無かったじゃないか。皆こんなウナギだかミミズだかみたいなのに恐れをなしていたのか。
「思わぬ獲物を仕留めたな」
イソメは誇らしげに呟いた。
このままこいつを持ち帰って村の衆に見せれば、皆安心するだろう。だが、それはこの穴場を独り占め出来なくなる事を意味する。このまま黙って、何事も無かったかのように振る舞おう―
イソメがそう思った時だった。
ゴボゴボゴボ…
幾つもの泡と共に、何か大きなモノが浮きあがってきた。
「なッ！？」
浮き上がってきたモノの正体に、イソメは思わず息を飲んだ。
それは、イソメと同じ年頃の、裸の女の亡骸だった。
彼女もまた海女なのだろう、漁で鍛えられた、しなやかながらも逞しい肢体と小麦色の肌とを持っていた。ただイソメとは対照的に、腰まで伸びた長い髪にやや大柄な体躯で、実に女らしい、出る所は出て引っ込む所は引っ込む体つきをしていた。
女は快楽と苦痛に満ちた、何とも言いがたい表情を浮かべて絶命し

ていた。
「こ、これは一体…！？」
何より驚くべきは女の股間であった。太く、赤黒いナニかが生えている。信じがたい事に、肉の質感を持つそれは長く伸びており、その先端こそが今しがた仕留めた化け物の頭部だったのだ。女から生えた化け物の長さは、一丈ほど。
化け物は、この女の身体の一部だった…！
イソメの頭の中は混乱した。自分は人殺しになってしまった！いやいや待て、こんな身体をした人間がいるわけが無い。では、目の前のコイツは一体何だというのか？
イソメが頭を抱えている間、女の亡骸に変化が起こった。股間から生えた化け物が、みるみるうちに縮んでいく。あっという間に、化け物は女の陰毛の下に潜り込み、見えなくなってしまった。異様な亡骸はただの女の亡骸となり、沈んで海の底へと還っていった。
イソメは、呆然と立ち尽くした。
化け物の正体は人間だった！？アタシは、本当に人を殺めてしまったのか…？
その時、イソメの身体に異変が起こった。
「な…何…？うあぁぁぁぁぁ！？」
化け物に止めの一撃を食らわせた時に大股を開いていたがために、返り血をもろに浴びてしまったイソメの股間。そこが、まるで焔に包まれたようにかっと熱くなった。思わず踞るイソメ。女陰が熱く火照り、疼く。そして、火照りと疼きは次第に陰裂の先端部分、２枚の肉ビラが合流する一点へと集中していく。
イソメのサネ。そこが、まるで火傷したかのようにジクジクと疼く。サネから生じる耐え難いむず痒さが、イソメを苛む。イソメは堪らず股間を押さえた。
「熱いぃぃぃ！陰部(ほと)があついよおぉぉ！？」
イソメの陰核は熱を帯び、完全に包皮から顔を出してはち切れんばかりに充血している。

「う…うう…！！」
身を焦がさんばかりに燃え上がる情欲。このままではどうにかなってしまいそうだ。イソメは荒ぶるサネをどうにか鎮めようと、２度目の手淫に耽った。
くりくり！くちゅくちゅ！
まるで親の仇の如く、乱暴に陰核を擦りまくった。
「イぐッ…！イぐッ！イぐイぐイぐイぐ…！」
１度イって感度が増していたところに加え、人為らざるモノの力で強引に欲情させられたイソメのサネはいつも以上に強い快楽を生み出し、みるみるうちにイソメの魂を極楽浄土へと導いていく。
「イぐぅううぅぅぅッ！？」
イソメは、あっという間に達してしまった。だが。
「おサネ…あづいぃぃぃ！！イ…イッだのに゛ぃ！？」
絶頂を迎えたというのに、陰部（ほと）の火照りが治まらない。むしろ、火に油を注いだかのように陰核の疼きが増してしまった。手を止めれば、たちまちあの猛烈なむず痒さに襲われる。イソメは狂ったようにサネを嬲り続けた。
「あっ…！っくあぁぁぁ！？」
「あひぃぃぃぃぃぃぃッ！？」
「ひぎゃあああぁぁぁぁ！？」
２度、３度、立て続けに気を遣ってしまう。しかしイけばイくほどサネの疼きは強さを増し、もはや指による刺激では物足りなくなってしまった。
「イぎだい…もっとぉ…！」
指より気持ち良くなれる物。イソメは陰核をこねくり回しながら、必死にそれを探し求めた。
「あったぁ！！」
イソメの目に止まったのは、自分の持ち物である桶。その中に、ぎっしりと詰まったアワビやサザエ。先ほど捕った獲物達だ。柔らかそうなアワビの身が、まるでイソメを誘うようにくねくねと蠢いて

いる。
あれにサネを擦りつけたら、どれ程気持ち良いだろう？大事な獲物だが、背に腹はかえられない。イソメは桶をひっくり返した。夢中になって、陰核を擦るのに丁度良い大きさのアワビを探す。そして、二寸（約６センチ）程の小アワビを見つけると手にとり、陰核に押し当てて擦りつけ始めた。

「はぐうぅぅぅぅぅ！？」

冷たく滑るアワビの身が、イソメの熱く火照る敏感な突起を柔らかく包み込む。

初めて味わう未知の快感に、イソメは身も心もうち震えた。

毛むくじゃらの黒ずんだ肉アワビと本物のアワビとの、世にも珍妙なる貝合わせ。イソメは無我夢中で、陰部（ほと）をアワビで摩擦し続けた。

ぬちょぬちょぬちょぬちょ！ぐちょぐちょぐちょぐちょ！

ぶよぶよとした冷たい身にまとわりつかれ、呑み込まれ、もみくちゃにされ。荒れ狂う軟体の大海原の中で、小舟のごとく翻弄される小さなイソメ。猛烈な快楽の大嵐に晒され、身体が魂ごと蕩けて無くなってしまいそうになっていた。

「ヒぎゅうぅぅぅぅぅぅ！？」

腰を浮かせて股間を前に付き出しながら、盛大にイく。

指とは比べ物にならない程の、素晴らしい快感。それでもイソメの陰核は鎮まらず、更なる快楽を求め続ける。イソメはアワビを使い続け、何度も何度も果てた。

そして、あれほど素晴らしく魅力的なアワビによる刺激にも慣れていってしまった。更にイソメの身体に、恐ろしい変化が起こっていた。

「おサネ…、アタシのおサネがぁあ！？」

飯粒程の大きさで、綺麗な薄桃色をしていたイソメのサネ。勃起しても包皮から僅かに顔を覗かせるばかりだった、可愛らしいその突起は今や醜く膨れ上がり、赤黒く染まって親指の先ほどの大きさになってしまっていた。

イソメがイく度に僅かではあるが陰核が肥大し、成長し続けてしまっていたのだ。
それでも手を止める事が出来ず、イソメは変わり果てた陰核を摘まみ上げ、そのまま男のモノのように、陰核を扱き出した。
しゅこしゅこしゅこしゅこしゅこしゅこしゅこしゅこしゅこしゅこ…！！
「らめぇ…！！イけない！！」
いくら扱いても、一度慣れてしまった指での刺激では快楽を得る事が出来なかった。陰核の疼きをほんの少し抑えるだけで、精一杯だった。
―何か無いか？ナニか…！？
イソメが身に付けていたふんどし。イソメはふんどしを掴むと、乾布摩擦の要領で陰核を擦った。
手とはまた違った布の感触。
「おぅッ…！おッ…！おふぅッ…！おごぉおおぉ！？」
サネを摩擦する度に快感が脳味噌を直撃し、十数回擦っては果てる事を繰り返す。それでもイソメの中で滾り続ける肉欲は治まらず、陰核もどんどん肥大していく。子供の陰茎ほどの大きさにまで肥大してしまう頃には、乾布摩擦では満足出来なくなってしまっていた。
「こ゛…ごん゛な゛も゛の゛ぉ゛！！」
イソメはやけになって、海水でふんどしを湿らせると、それで陰核を思いきりひっぱたたいた。
バチィィン！
「ひぃいいいいいいいいッ！？」
鋭い痛みがサネに走る。だが、それはすぐにじんわりとした快感に変わる。
「ひあぁぁ！ひぎぃ！いだっ…！ぎもぢいぃぃぃ！！」
イソメは、痛さと気持ち良さの中で悶え狂い、イき続けた。
イソメのサネはさらに膨れ上がり、村の逞しい男達も敵わぬ巨根へと成長してしまっていた。
日はとうに暮れ、夜の闇が訪れつつある。もはや、イソメを満たし

てくれそうな物は、舟の中には無い。
「イぎだい…！！」
イソメはそう叫ぶと、真っ暗な海へと飛び込んだ。
―イきたいイきたいイきたいイきたいイきたい…！！
海の底に、昼間の女が横たわっていた。海中の岩に引っかかって、潮で流されずにいたのだ。
―アタシをイかせてくれるもの…、女…、女の陰部(ほと)…！！
イソメは迷う事無く亡骸の腰を抱き上げると、その女陰に雄々しくそそり勃つ女根を突き立てた。
より熱くより凶暴に猛り狂うイソメが、女の柔肉に包まれる。今までに無い凄まじい快感が、イソメの脳天に突き刺さった。
「んほおぉぉぉぉぉぉぉぉ！？」
イソメは貪るように腰を振った。
ズン！ズン！ズン！ズン！
男の身体に人並み以上の興味を持ち、逞しい男と交わる事を何よりも望んでいたイソメ。そんなイソメが男のように同性を、それも亡骸を犯すというあまりにも皮肉な光景が、暗い海の底で繰り広げられる。
「あ゛ぁ゛ぁ゛ぁ゛ぁ゛ぎぼぢぃ゛ぃ゛ぃ゛ぃ゛ぃ゛！！」
「お゛ザネ゛ぇ゛ぇ゛ぇ゛！とろけるぅぅぅぅうううぅぅ！！」
「こしぃぃぃぃ！どま゛ら゛な゛い゛…ひいぃぃぃぃぃぃぃぃ！！」
一突きする毎に快楽の頂点へと登りつめ、イソメの魂は何度も天空に舞い上がった。
ムクムクムクッ！ビキッ！ビキビキッ！
イソメの陰核が、音を立てんばかりに脈打ちながらみるみるうちに太く長く逞しく肥大、成長していく。馬のイチモツまでになってもなお、大きく醜く膨れ上がっていった。
「あ゛あ゛あ゛あ゛ぁ゛ぁ゛ぁ゛ぁ゛！！ごわ゛れ゛り゛ゅ゛…、じぬ゛う゛ぅ゛ぅ゛ぅ゛ぅ゛ぅ゛ぅ゛！！」
イソメの哀れな陰核は、女陰ごと亡骸を裂いてしまわんばかりにま

で巨大化してしまっている。イソメもいくら潜水に長けた海女とはいえ、これほど長い間潜っていれば流石に息が続かなくなるはずなのだが、不思議な事に息苦しさは全く感じなかった。
ズボ！ズボ！ズポ！ズポ！
女がよほどの名器の持ち主なのか、それとも何か妖しの力の成せる業なのか、今度は刺激に慣れてしまう事無くイソメの陰核は快楽を発し続けた。イソメは狂ったように亡骸と交わり続け、思う存分イきまくる。その間にも、イソメの女根は醜く肥大し続ける。
ボゴォ゛！！
とうとう、巨大になりすぎたサネが、女の腹を突き破って外へ飛び出してしまった。その長さは一丈、太さは三寸ほどもあろうか。
「あ…、ああ…！！」
サネへの刺激が途絶えたため、イソメは一気に猛烈過ぎるむず痒さに襲われた。
「う゛あ゛ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁあああああああああああぁぁぁぁぁぁぁ！？」
あまりの焦燥感に、イソメは釣り針に掛かった魚のように悶え狂った。
「イぎだい゛ぃ゛ぃ゛ぃ゛ぃ゛！！……………………………………ぐ…い゛だい゛……。喰いたい…！肉…、ニクゥゥゥゥゥゥゥゥゥッ！！」
イソメのサネがビクン！ビクン！と脈打ち、グネグネとのたうち回る。そして、ぶるんと大きく身震いし。
ぐぱぁっ！！
サネの先っぽが裂けた。裂け目の内には、ウツボのような鋭い牙がびっしりと生えていた。牙を持つ口を生じさせたイソメのサネは、まるで自らの意思を得たかのように自由に動き回る。そして亡骸の乳房にまで頭を伸ばすと齧りつき、一気に喰いちぎった。
「あ゛ばばばばばばばばばばばあぁぁぁぁぁぁぁぁぁああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」

サネが女の肉を咀嚼し、飲み込む度にイソメは腰も砕けんばかりの快楽を味わった。
サネが飲み込んだ肉塊がサネの内を押し広げながら通り抜ける瞬間に得られる、えもいわれぬほどの甘美な衝撃。たったひと呑みで何十回、いや何百回分もの絶頂を与えられ続けるイソメ。
「…………………！？………………………………………………！！…………！！！」
イソメはあまりの快感に、もはや悲鳴とも言えない悲鳴を上げ続けた。
亡骸を喰いちぎっては喰らい、喰いちぎっては喰らい。化け物と化したイソメの陰核は、瞬く間に獲物を平らげていく。
骨ばかりを遺して最後の肉片を飲み込む頃、やっとあの疼きが治まった。イソメの陰核は、人の肉を喰らってようやく満たされたのだった。
「…あは…。あはははは…」
度重なる、そしてあまりにも凄まじい快楽を受け続けたために、イソメの脳味噌はすっかり蕩けきってしまっていた。
「キュウゥゥゥゥ」
人喰いの魔物と成り果てたイソメの陰核が、満足そうな声を上げる。そのおぞましい姿はまさに、イソメが仕留めたあの化け物そのものであった。
「…おいでぇ、ぼうやぁ。…おうちにかえろぉ？」
化け物の頭を愛おしそうに撫でながら優しく語りかけるイソメの、焦点の定まらぬ虚ろな目とだらしなく蕩けた顔。正気を失い人であることを棄てた、かつてイソメだったモノは化け物と共に海の底へと消えていった。
それ以来、イソメの姿をみた者は、誰一人としていなかった。
村の者達は、あの娘は魔物に喰われたか拐かされたとして大いに恐れ、件の小島について口にすることすら憚られるようになったとい

う。

海女と「サネ鬼」（後書き）

現代編に続く予定です。